

## 大学生の歯科に対する意識調査 — 歯科健診時のアンケートから —

### The questionnaire of oral health awareness for Kagoshima University students

○松本 祐子<sup>1)</sup>, 岩下洋一朗<sup>2)</sup>, 吉田 礼子<sup>1)</sup>, 中山 歩<sup>1)</sup>, 大戸 敬之<sup>1)</sup>, 作田 哲也<sup>1)</sup>, 古川 周平<sup>1)</sup>, 田口 則宏<sup>1, 2)</sup>

<sup>1)</sup> 鹿児島大学 学術研究院 医歯学域 鹿児島大学病院 歯科総合診療部

<sup>2)</sup> 鹿児島大学 学術研究院 医歯学域 歯学系 医歯学総合研究科 健康科学専攻 歯科医学教育実践学分野

○Matsumoto Y.<sup>1</sup>, Iwashita Y.<sup>2</sup>, Yoshida R.<sup>1</sup>, Nakayama A.<sup>1</sup>, Oto T.<sup>1</sup>, Sakuta T.<sup>1</sup>, Furukawa S.<sup>1</sup>, Taguchi N.<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup> Kagoshima University, Research and Education Assembly, Medical and Dental Sciences Area, Kagoshima University Hospital, General Dentistry

<sup>2</sup> Kagoshima University, Research and Education Assembly, Medical and Dental Sciences Area, Graduate School of Medical and Dental Sciences, Health Research Course, Dental Education

#### 【緒言】

鹿児島大学では、毎年、全学の学部生と大学院生を対象に希望者に対して歯科健診を実施しており、「歯科健診アンケート」への協力を依頼している。平成27年からは、口腔に対する意識を調査する目的で、アンケート項目を追加し、前回実施時は、5分程度で「歯」の絵を描いてもらい、「前歯」「奥歯」ともに2根描く例が多いという興味深い結果を得た。今年度は、「歯科に関するイメージ調査」という項目を新たに設定して調査を行った。

#### 【対象と方法】

平成29年4月の健康診断時に歯科健診を希望受診した鹿児島大学生計730名を対象に、多肢選択式アンケート調査を実施した。アンケート内容は、歯磨きの回数・時間・補助器具使用の有無、かかりつけ歯科医院の有無、歯科治療経験、口の中で気になっていること等であり、さらに今回は、虫歯・歯周病・歯石・親知らず等の知識を問う項目を新設し、「歯医者に対するイメージ」は自由記載での回答とした。

#### 【結果と考察】

「虫歯や歯周病は口腔内細菌が原因である」「歯石は細菌の塊で定期的に除去しないと溜まり続ける」と知っている割合は、それぞれ88%、72%と高かった。「ストレスと関連すると思う項目」は、「歯ぎしり」40%、「口臭」22%、「歯周病」13%であり、「虫歯」「顎関節症」「親知らず」は10%以下だった。

自由記載の「歯医者に対するイメージ」は、「優しい」が最も多く、次に「歯を治してくれる人」「歯の専門家」等の仕事内容に関する記述が多かった。さらに「清潔」と「怖い」がほぼ同数で並び、以下、「痛い」「白衣・マスク」「頭が良い」「丁寧」と続いた。

アンケートの対象者は、歯科健診を希望した学生であり、半数以上がリピーターであることから、一般の大学生よりも歯科に対する意識は高く、苦手意識も少ないと思われ、歯科知識の有無や記載されたイメージが比較的良好という結果にも影響している可能性が考えられた。

## 広島大学病院歯科研修医の経験における省察深さの検討

Investigation of the depth of reflection in experience of dental trainees at Hiroshima University hospital

○大林 泰二, 西 裕美, 小原 勝, 河口 浩之  
広島大学病院 口腔総合診療科

○Obayashi T., Nishi H., Ohara M., Kawaguchi H.  
Department of Advanced General Dentistry, Hiroshima University Hospital

### 【緒言】

歯科研修医は研修期間中に様々な経験をする。臨床経験における成功や失敗を含めてPositiveやNegativeな経験を通じて彼らは成長するが、彼らが出来事を振り返る時、Negativeな経験がよりクリティカルな省察(振り返り)となることを過去4年分のデータから見出している。今回、広島大学病院外来診療棟移転後のデータ3年分も加えて検討したので報告する。

### 【方法】

広島大学病院歯科研修医に対し、1年間の研修修了時に研修を振り返って一番こころに残った出来事(SEA)を記載させた。これらのデータ7年分(平成22年度~平成28年度)をSCAT(大谷, 2010)で質的分析し、Positive image, Negative image, それ以外の3種類に分類し、Positive image, Negative imageについて省察深さを評価した。評価にはSandars法(2009)及びO' Sullivan法(2010)を用いた。評価は2名の研究者で行い、weighted kappa検定にて良好な一致率を確認した。これらの省察深さをMann-WhitneyのU検定で比較検討した。

### 【結果】

7年間の研修歯科医総数は333名で上記SEA回収率は91.9%であった(306名)。内、Positiveな記載をしたものは152名、Negativeな記載をしたものは72名であった。7年分のデータにおけるPositive群の中央値はSandars法で2、O' Sullivan法で1、Negative群の中央値はSandars法で2.5、O' Sullivan法で3であった。Mann-WhitneyのU検定を行った結果、いずれの方法においても有意水準5%のもとで両群の中央値には有意な差が認められた。

### 【考察】

歯科研修医が成長するためにはPositiveな経験、Negativeな経験いずれも重要であるが、Negativeな経験がよりクリティカルな振り返りとなる。しかしPositiveな記載をした者はNegativeな記載をした者の倍以上であり、Negativeな経験は表出しにくいことが示唆される。研修歯科医教育においてはNo Blame Cultureの重要性を認識し、よりクリティカルな省察を促すことが重要と考える。

## 登院実習前の学生が考える「良い歯科医師」とは？ 第1報

### Good model of dental professionals that dental students image (I)

○清田 幸一<sup>1)</sup>, 鬼塚 千絵<sup>2)</sup>, 板家 朗<sup>2)</sup>, 坂本 貴文<sup>1)</sup>, 佐々木崇良<sup>1)</sup>, 瓜生 和彦<sup>1)</sup>, 木尾 哲朗<sup>2)</sup>  
九州歯科大学 歯学部 <sup>1)</sup> 歯学科 学生  
<sup>2)</sup> 口腔機能学講座 総合診療学分野

○Kiyota K.<sup>1</sup>, Onizuka C.<sup>2</sup>, Itaya A.<sup>2</sup>, Sakamoto T.<sup>1</sup>, Sasaki T.<sup>1</sup>, Uryu K.<sup>2</sup> and Konoo T.<sup>2</sup>  
Kyushu Dental University <sup>1</sup> School of Dentistry  
<sup>2</sup> Department of Oral Functions Division for Comprehensive Dentistry

#### 【目的】

医療人はSternの神殿モデルに唱えられているように、診断と治療の能力だけでなく、高い人間性が求められる。理想の医師像についてはいくつか先行研究があるが、理想の歯科医師像についてはほとんど報告がない。今回の研究目的は、学生が考える良い歯科医師像を知ることにより、これから臨床実習を行う学生が何を念頭に患者と向き合うべきかを考えることにある。

#### 【方法】

研究への同意を得た九州歯科大学歯学部歯学科5年生90名を対象に、「良い歯科医師について3つ記述する」という無記名記述式アンケート調査を行った。回収したアンケート用紙の回答を、テキストマイニングによるキーワード分析とカテゴリー分類による分析、男女の違いについて検討を行った。

#### 【結果】

有効回答率は99.2%であった。テキストマイニングによる単語(キーワード)の頻出度について多いのは、名詞では「患者」56, 「技術」34, 「治療」30, 動詞では「くれる」32, 「できる」30, 「考える」15, 形容詞では「良い」14, 「高い」7, 「いい」7であった。カテゴリー分類では、6つに分けることができ、その内訳としては、「人間関係」28.1%, 「技術」27.4%, 「人格」23.3%, 「コミュニケーション」11.1%, 「向上心」4.8%, 「経済観念」2.2%であった。男性では「人格」が、女性では「人間関係」が最も多かった。

#### 【考察】

上記の結果から、歯学部歯学科5年生が考える良い歯科医師は、「人間関係」, 「技術」, 「人格」はイメージしやすく、逆に「向上心」や「経済観念」はイメージしにくかったと思われる。今回イメージしにくかった向上心を高めていくことで人間関係、技術、人格をそれぞれ高めていくことができるのではないかと考えられる。向上心の記述例の中には「自己研鑽を怠らず、勉強し続ける歯科医師」とあったが、まさにこれから本格的な登院実習が始まるにあたりこの意識を持つことが求められるのではないかとと思われる。

## 登院実習前の学生が考える「良い歯科医師」とは？ 第2報

### Good model of dental professionals that dental students image (II)

○佐々木崇良<sup>1)</sup>, 鬼塚 千絵<sup>2)</sup>, 板家 朗<sup>2)</sup>, 清田 幸一<sup>1)</sup>, 坂本 貴文<sup>1)</sup>, 瓜生 和彦<sup>1)</sup>, 木尾 哲朗<sup>2)</sup>  
九州歯科大学 歯学部 <sup>1)</sup> 歯学科 学生  
<sup>2)</sup> 口腔機能学講座 総合診療学分野

○Sasaki T.<sup>1</sup>, Onizuka C.<sup>2</sup>, Itaya A.<sup>2</sup>, Kiyota K.<sup>1</sup>, Sakamoto T.<sup>1</sup>, Uryu K.<sup>2</sup> and Konoo T.<sup>2</sup>  
Kyushu Dental University <sup>1</sup> School of Dentistry  
<sup>2</sup> Department of Oral Functions Division for Comprehensive Dentistry

#### 【目的】

歯学教育モデル・コア・カリキュラム平成28年度改訂版(案)は、キャッチフレーズとして「多様なニーズに対応できる歯科医師の養成」を謳い、共有すべき価値観を医学・歯学で共通化している。さらにプロフェッショナリズムを含む「歯科医師として求められる基本的な資質・能力」は、学修により獲得可能であると明示している。今回の研究目的は、学生が考える「良い歯科医師像」をプロフェッショナリズムの定義と比較検討することで、「歯科医師像」についてイメージしやすいものとしにくいものを明らかにし、教育へのフィードバックの一助とすることにある。

#### 【方法】

研究への同意を得た九州歯科大学歯学部歯学科5年生90名を対象に、「良い歯科医師像について3つ記述する」という無記名記述式のアンケート調査を行った。回収したアンケート用紙の回答を、Sternの神殿モデルの7項目(3つの基盤「臨床能力」, 「コミュニケーション技術」, 「倫理的及び法的解釈」と4つの原則「卓越性」, 「人間性」, 「説明責任」, 「利他主義」)にカテゴリー分類し、分析・検討を行った。

#### 【結果】

回収率は100%で、有効回答率は99.2%であった。7項目に分類された記述の数は、多い順に「人間性」, 「臨床能力」, 「コミュニケーション技術」であった。「臨床能力」に分類されたものでは、知識よりも技術に関する記述が多かった。神殿モデルの4つの原則に分類された記述の数は、多い順に「人間性」, 「卓越性」, 「利他主義」, 「説明責任」であった。

#### 【考察】

歯学部歯学科5年生が考える「良い歯科医師」は、人間性と臨床能力の技術面がイメージしやすいことが明らかとなった。神殿モデルの各項目へ分類するときに迷うケースが多く、卓越性, 説明責任, 利他主義はイメージしにくかった。今後、学生教育に活かしていくためには、具体例を挙げる等の工夫が必要ではないかと考えられた。

## 歯科医師臨床研修修了後の進路 —大学院進学状況—

### Career Paths of Dental Trainees after Completion of Clinical Training Program

#### — Entrance to Graduate Schools —

○泉田 明男, 加地 仁, 王 鋭, 南 慎太郎, 菊池 雅彦  
東北大学病院 総合歯科診療部

○Akio Izumida, Hitoshi Kachi, Rui Wang, Shintaro Minami, Masahiko Kikuchi  
Department of Comprehensive Dentistry, Tohoku University Hospital

#### 【緒言】

平成18年度に現行の歯科医師臨床研修が開始して10年が経過した。当施設では当初単独型プログラムのみ  
の研修を行っていたが、平成23年度より複合型プログラムを導入し、以後単独型プログラムと複合型プロ  
グラムを併用し現在に至っている。今回、複合型プログラム導入以降の大学院進学状況について報告する。

#### 【方法】

研修修了時に研修医が記入した研修修了後の連絡先をもとに、研修修了直後の大学院進学状況を調べた。

#### 【結果】

年度別の大学院進学率は全体で40.0~56.4%であり、単独型プログラムでは40.0~58.3%、また複合型プロ  
グラムでは33.3~50.0%であった。

#### 【考察】

臨床研修中、研修医からは高頻度治療についてより多くの症例を希望する声を聞くことが多い。従来、大  
学院は研究の場であるが、当施設では、大学院への進学が全体で半数近くを占めた。厚生労働省による平成  
28年度歯科医師臨床研修修了者アンケート調査結果では、大学院等で研究する者が10.5%とあり、全国的な  
平均よりもはるかに多い。このことは、研修医が研究もさることながら2年目以降の臨床を行う場として選  
んだ可能性がある。単独型プログラムで半数近くの研修医が大学院へ進学していることについては、単独型  
施設にて研修を行った後、研修の延長として大学院進学を選択した研修医がいるものと考えられる。一方、  
複合型プログラムを選択した研修医は単独型プログラムを選択した研修医よりも大学院へ進学する割合がや  
や少ない傾向にあった。これは、複合型の施設にて多くの症例に触れ、研修終了後は歯科診療所へ勤務する  
ことを考える研修医が多いものと推測された。

#### 【まとめ】

当施設の研修を修了した研修医の多くが大学院へ進学している。このことは研修医が2年目以降に専門分  
野に従事する機会が多くなると考えられるため、研修期間中はより広範囲にわたる領域の研修を行う必要が  
あると思われる。